

「星空と路-これまでの記憶、これからの記録-」アフタートーク 島津信子×福原悠介

開催日時：2019 年 3 月 9 日 10:30-12:15

話し手：島津信子、福原悠介（映像作家）

進行：村田怜央（せんだいメディアテーク）

村田：今日はよろしくお願いいたします。私、せんだいメディアテークの村田と申します。じゃあまずは自己紹介を島津さんからお願いします。

島津：島津信子と申します。みやぎ民話の会に属してまして、長年教員をやってましたけども、いまはフリーというか、自宅におります。

福原：福原悠介と申します。作品をご覧くださいありがとうございます。僕は普段映像の仕事をしていて、民話の会のみなさんとは、メディアテークの「民話 声の図書室」という民話の映像記録を作るプロジェクトで一緒にやらせていただいてまして、その関係でお声がけをいただきまして、この『飯館村に帰る』で撮影と編集をやらせていただきました。よろしくお願いします。

村田：はい。じゃあお掛けいただいて。で、いまもう後ろに映っているんですけども、インタビューに答えていただいたかたが数名おりますので、お話のなかで、インタビューのなかであのかたがみたいなのがあると思いますので、ちょっとお顔と名前、わかるようにさせていただいていたいました。じゃあさっそく始めていこうかと思います。

まず、飯館村のことですかね、どういう状況でいまこうっていうのをお話しできたらと思うんですけども、まず 2011 年の 3 月に震災があって、原発事故があって、映像のなかでも入ってたと思うんですけど、避難、仮設住宅に入ったのが 6 月ごろみたいなことを聞いていたと思うんですけど、結構時間があって、それはあれですかね、事前に伺っていた話ですと避難するってなってから仮設の準備をするからちょっと遅れたっていう形になるんですかね？

島津：仮設、村で建てた仮設っていうのは 7 月ぐらいに完成だと思います。で、私が関わらせていただいた国見の仮設っていうのは、福島県の国見町の人たちが地震のために避難する場所として、国見で建てた仮設だったんですが、思ったほど人が入らなかった。それで、現にある状態で空いてるので飯館村がそこを借り受けた形で入られたんですね。だから比較的ほかの方々よりは早く入れたみたいです。

村田：じゃあやっぱり最初、飯館村の方たち用の仮設っていうのは考えられてないっていう

ことですよ？

島津：まだ準備が整わなかったっていうことで、ここは早くに出来上がっていたっていうことになると思います。実際の飯館村は、報道でもあったと思いますけども、なかなか避難っていう形にならなくて、これだけの線量があるっていうことも少し遅くに報道されたと思うんですね。だから村の人たちも最初はわからなくて、そのまま住み続けた方もたくさんいらっしゃったということだと思うんですけれども。

村田：はい。ありがとうございます。で、少し時間が空いて、仮設住宅に入られて、6年ぐらいそこでみなさん過ごされて、2017年の3月に避難解除ということになって、帰村された方がもともとの一割ぐらいと聞いていたんですが、みなさんやっぱりご高齢の方が多いんでしょうか？

島津：ほとんど、まあ、高齢って言うていいかな、60代が一番若いくらいじゃないですか？70代、80代、90代の方が多いと思うんです。私もネットで調べたときに、飯館村って6000から7000人ぐらいの人口ですっていうふうに書いてあったんですが、いま現在村に戻ったかたは1000、何人ぐらいかな、だから一割よりは多いかなと思いますけども、ただそのなかには、ここにいらっしゃる佐藤さんご夫婦は福島の方にもおうちがあって、村にもおうちがあってっていうことで、行ったり来たりしている、そういう方もいらっしゃるの、本当にこの村に純粋に住んでいらっしゃるっていうのは、その数よりも少ないのかなと思います。

村田：はい。ありがとうございます。で、帰村されて、いまご覧いただいたインタビューっていう時系列になると思うんですけども、では、まず最初に飯館村のみなさんにお話を聞きに行ったり、交流をされた経緯みたいなものを、島津さんのほうからお伺いできたらと思います。

島津：はい。私は長年民話をやっていて、民話の語り手のかたがいらっしゃるかなっていうようなこともありましたし、自分が語れるお話をなにかに使えないかなっていうこともあって、震災のあとも教員生活何年か続けたんですけども、退職のちょっと前に、私たちの仲間の柴田さんっていうかたが国見の仮設に行ってお話を聞いてもらってるっていうようなことを聞きましたので、私も一緒に連れて行ってもらいました。それが最初のきっかけです。まだそのときは在職中だったんですが、次の年に辞めたところで、最初はその柴田さんが、屁ったれ嫁御の話をしたら、すごいみんな、いままで、こう、溜まっていたものが、その笑いで吹っ切れたっていう感じで、その柴田さんが行くと屁ったれ屁ったれと呼ばれるようになったとかそんな話も聞いていたので（笑）、私もなんか楽しい話ができないかな

あと。で、私が行ったときには狐の話をしたんですけれども、やっぱり自分も狐に化かされたことがあるよとかって言う話を言ってくれる人がいたり、あと、ここに出てきた花井トヨさんっていうかたは、ほんとにご苦労をされたかたで、ちいさいころにお父さんに炭焼き小屋のところで昔話を聞いたんだって、いくつか話を聞かせていただいたんです。で、このトヨさんの話、それから不思議な体験を、こんなおばあさんがいたってということで、記録しておけないかなあと思って、一回最初は福原さんにそれをお願いして、一緒に行ってもらいました。

それでそのときに元正さんとか、ほかの方々にも会っていただいて、で、この人たちの話をどんなふうに撮って行ったらいいのかなあって、記録したいなと思いながら、ただ自分でも中途半端な感じでいたんですね、昔話をしているわけでもないし、どうだろうなあって思っていたんですが、まあ、その後もときどき行事に呼んでいただいて、私の拙い話を聞いていただいたりしながら、少しずつ交流はずっと続けていたものですから、このわすれん！の話をいただいたときに、ああ、そうだ、この人たちが、なんつったってやっぱり、この想いを、実際に仮設から村に戻られて、最初はみんな、このトヨさんなんか、ああ、せいせいしたよっておっしゃるんですけども、その後1年2年経つうちに、なんかこう、だんだんしぼんでいくような気がして、でもやっぱり村に戻ってよかったっていう想いを持っている方々なので、この想いをなんかこう、記録できないかなあって思って、福原さんに改めてお願いして、一緒にインタビューっていうかお話を聞かせていただいたものです。でも、ほんとにうまく編集していただいたなあって思っています。

村田：はい。じゃあ、国見の仮設にお話をしにボランティアに行かれていて、それがいつごろ、何年ごろになりますか？ 最初。

島津：最初に行ったのが13年の12月でした。で、14年には、私、宮城民話の学校って言って、丸森を会場にして、民話に関わる人たちのイベントっていうか集まりを持っていたんですが、そういう、国見の仮設の方々には直接はね、お話、昔話、民話とまたちょっと違うところだったので、そのなかでは、佐藤さんご夫婦に来ていただいて、体験を聞かせていただいたり、あと、国見じゃないんですけど、松川のほうの仮設にいらっしゃる菅野テツ子さんっていうかたには、昔話を含めて、いろんな避難のお話とかを聞かせていただいていた。

村田：2013年ごろからお話とかして、コミュニケーションを取られていただけあって、けっこう空気感がいいというか、インタビュー映像っていうふうになると、固くなっちゃうとか、答えていただくかたが、なりがちなって思うんですけど、すごくいい空気です。インタビューできているような気がしていて、そう思って見ていました。で、その花井トヨさんのインタビューが最初って言うことですね。福原さんは、そのときが初めてですか？ 飯館村

に行ったのは。

福原：そうですね。撮影の前に一回顔を出しに行って、そのときはカメラを回さずに、2回目に行ったときに、この撮影した、使った映像ですね。それまでは全然行ったことなかったです。

村田：最初、カメラを持って行ったときに、いろいろお話を聞いたりとか、村の様子を見たりすると思うんですけど、印象と違ってどうでした？

福原：ほんとに平らでだだっ広い、すごいでっかいところなんですよ、飯舘村って。こう、特に目印になるような建物もなくて、どこを見ていいのかわかんないみたいな場所で。たまにさっき出てきたみたいなフレコンバッグの、放射能汚染された土を入れた山がどーんと出てくるみたいな。で、人もいない。たまに工事の人がいるみたいな感じで。なにをもって印象としていいのかわからないみたいな場所っていう感じですね。なにを思い出せばいいのかわからない。

村田：そうですね。インタビューに答えていただいてるかたは、村のいいところとか、明るい感じでお話ししてくれるかたが多いなっていう印象だったんですけど、その間に挟まる風景になったときに、工事の様子だったりとか、だれも人が通っていなかったりだとか、そのギャップがすごいなと思っていて、でもやっぱりお話しされるかたからは村への愛情みたいなものがすごく感じられて。

でも外を見ると、そのころの村とはたぶん違うじゃないですか、状況も。で、ご近所づきあいとかもだいぶ変わっていると思うんですけど、でもやっぱり自分の村に対して、帰村された方だからっていうのもあると思うんですけど、すごく強い愛情もあって、そういう部分をすごくみなさんお話しされているなと思っていて。で、自分のこととして考えると、僕は仙台出身なんですけど、仙台に対してそこまで思えるかなって考えると、ちょっと思えないような気がしているんですね。『飯舘村に帰る』でインタビューに答えていただいたみなさんは、故郷に対する強い思いみたいな、愛情みたいなものって、やっぱりすごくあるんですかね？

島津：飯舘村ってほんとに高いところにあって、作物もなかなかうまく、たぶん、お米の収量とかだって、平らなあったかいところに比べたら少ないかなと思うんです。でもそんななかで、までえな村って、までえって丁寧とか優しい村、そういう思いの村っていうことで、美しい村百選っていうことでね、選ばれたりとかしていたところなんです。で、佐藤さんご夫婦に私、一番最初に村に連れて行ってもらったときは、山津見神社っていう、オオカミの天井絵とか、そういうのもありますし、ここには酒屋さんがあったとか、ここではコーヒーを出していたとか、ほんとに、村のいいところをいっぱい案内してもらったんですね。あ、

こんなに大事にしている村なんだなあって、やっぱり、私も自分の生まれたところとか、住んでいるところをこんなに大事に語れるかなあっていう思いでいた。それが第一印象だったんですね。

そういうところを、なんでなのかなって思いながら、菅野重子さんが、いまはほんとに自分の家にデンと座って毎日向かいの山を眺めてるんです。俺はこの山見ているのが一番いいんだっていうんですけれども、そうですねって山を見たときに、その真下に、あのフレコンバッグが山に積んであるんです。重子さんから見たら、この下は見えないかなって思うぎりぎりの線のところにいっぱいあって、これが現実なんだなっていう感じでね、これをやっぱりなんかみんなにわかってもらいたいっていう、そういう思いは、やっぱりありましたね。

村田：そうですね、目線というか、自分の愛すべきところは確固としてある、紅葉が好きだからとおっしゃっていたと思うんですけれども、やっぱり村が好きなんだなっていうのが、あるなって思いました。

じゃあちょっと福原さんにお伺いしたいんですけど、カメラを向けてお話を聞くとするんですけれども、なんでしょう、オンとオフというか、インタビュー撮りますよって言って撮ったときってやっぱりちょっと空気変わったりするものなんじゃないかな？

福原：そう…でもなかったかもしれないけど（笑）、なるべく僕も、人の家に行ってお邪魔して撮るので、余計なことをしないようにしようとしていたっていうのはあるかもしれませんが。あとはまあ、島津さんがその前から親しくされていた方たちだったので、そのへんは、自然にって言ったらなんですけど、あまり余計なプレッシャーは与えなかったかもしれないし。

村田：あの、最後の元正さん。元正さんも自分の思い出とか語っていただいたなかで、でもおひとりだけ男性っていうこともあるのかわからないですけど、フレコンバッグのことだったりとか、原発、放射能のことだったりとかに言及されていたような気がするんですけれども、なんでしょう、やっぱそれっていうのは、カメラがあるからみたいなのところもあったりするんですか？

福原：それはたぶん元正さんについてはあって、ある種の覚悟を持って撮影に臨んでくれたんじゃないかと思います。途中、撮影中に電気屋さんが来たんですよね。ちょっといまから停電作業を10分ぐらいやっていいですかっていうお兄さんが来たんですけど、そしてたら元正さんが出て行って、「いやいまちょっと大事なことでっから、あとにしてくんねえか」って、僕脇で聞いていて、ああ、大事なことでっからって思って（笑）、ちゃんとしなきゃって思ったんですけど。たぶんカメラがあったからああいうストレート

な、ダイレクトな言葉を話してくれたっていうのはあるんじゃないかなと思うんですけど、どうなんですかね、島津さん。

島津：元正さんにこの撮影の前に、一応、こんなふう撮影に行きますからってお話ししに行ったときに、ちょうどキノコがいっぱい玄関先にダーッと並んでたんです（笑）。えーっ、これどうしたんですかって聞いたら、もう、キノコ採りの話をして。大丈夫なんですかって聞いたら、大丈夫だ、俺の弟とふたりで山に行くんだっていう話とか、自分はキノコの見分けの先生だから、自分が行っている直売所からは誰もそういう食あたりなんて出したことないって言って、自慢話。それから仮設にいたときも、自分はいろんなところに車で遊びに行ったりとか、楽しい話ばかりしてくれたんですね。だから元正さんがこのときにどんな話してくれるかって、ちょっと不安なところもあったんですけど、こんなにこう、直接的に話してくれるとは思わなかったです。やっぱり覚悟ってあるんだなって思いました。

村田：じゃあやっぱり村の現状だったりとかっていうのを伝えないってというような想いみたいなのもあったんですね。ただでもその、最後に元正さんがそういう内容をしゃべっていただいたことで、前半の方たちも楽しいこととか思い出を語ってくれていたんですけど、そのなかにも、そういう不安感だったりとか、フレコンバッグがまだあるですとか、そういう気持ちみたいなのはみなさんあるんだらうなっていうふうに感じていて、いろんな複雑な思いを抱えながら村に住んでいるんだらうなってすごく感じる映像だなと思いました。

島津：最初のおふたりは比較的年齢も若い方々なんですけど、今度こういうふうにしますっていう話をしに行ったら、あのときいろいろ聞かれることわかってたんだけど、それでもやっぱり言い足りなかったっていうことをおっしゃっていたので、まだまだほんとに深い想いがあるんだらうなと思います。あと、実はここに飯館村のかたに来ていただいているんですけど、長正さんとおっしゃいます。

村田：じゃあちょっと、来ていただいているので少しお話をお伺いしようかなと思います。

長正：こんにち。長正と申します。

村田：映像いまご覧いただいて、まず感想とかをいただけたらと思うんですが、いかがでしたか？

長正：このかたはみんな顔見知りのかたばかりです。この映像を見て、最後の菅野元正さんの話を見て、ものすごく的を射た話をしてくれたなと思ってびっくりしています。実は私もこういう考えです。

いま飯館村は 1000 人ぐらいのかたが戻ってこられてまして、今月の末で一応締め切られますけれども、来年の 4 月になれば帰ってくる方がいくらか増えるのかなって思っているところですが、なかなかみなさんも話を聞いているように、よそにもう長い間避難して暮らしているものですから、うちを作られたということで、なかなか村に戻ってこれないという方々がだいぶ多くいるようです。私はあの、根っからの飯館の者ですから、戸惑いなく戻ってきていますけれどもね。はい。

村田：長正さんご自身は、いま村で生活されていて思うことってというのは、まあ、いま元正さんと同じ気持ちだとおっしゃっていましたがけれども、なんかありますか？

長正：そうですね、すごく不便がいっぱいです。というのはまず食料品店がないということですね。コンビニは近くに 2 ヶ所ばかりあるんですけれども、それ以外の食料品店がないということ、いま帰還した住民で声を高くしているところなんです、なかなか住民が少ないということ、新たに作るということにすごく行政のほうも戸惑っているようですけど、一番はそこですね。

あとは、さっき映像のなかで、歩いている人もいないようだけどっていうのがあったんですけども（笑）、ほんとにぶらぶら歩いているかたなんかひとりもおりません。ただいま、どこも壊したり作り替えたりっていうことで、業者がたくさん入ってましてね。いま映像のなかでも車の音がありましたけれども、そういうかたはいるんですけども、夜になるととっても静かです。星だけがきれいに見えるっていう感じで（笑）

あの一、不便もありますけれども、戻ってきたい人だけが戻ってきているので、帰ってきた人たちはみんな目がきらきらしているというか、私も、老人のかたたちが集まる、毎日あるんですけども、そこに私も暇があると足を運んでいるんですけども、そこに集まる人たちはみんな生き生きしているんですね。やっぱり帰ってきたいから帰ってきた。無理にね、戻ってきなくて言わなくてもいいんでないかなと最近思うようになってきたところです。

村田：ありがとうございます。いまのお話にもありましたけど、やっぱほかのところに家があって、息子さんだとかの家族はいるけど、自分だけ村に住んでいるとかっていうかたも結構いらっしゃるんですね。

島津：そうですね、ここにいらっしゃるかたは、一応、ご家族、菅野重子さんだけは一人暮らしっていうことになるんですけども、ここにいらっしゃるなかではね。でも息子さんが毎日のように来てくれるっていうことですね。だから、そういう意味ではほんとにま

るっきりの不安ではないっておっしゃいますけども。ただやっぱりね、元正さんなんかもご夫婦とも 80 代超してて。トヨさんの息子さん、トヨさんはその息子さんご夫婦と村に戻ったんですが、村に戻ってほんとに何か月もしないうちにその一番頼りにしていた息子さんが急に亡くなったんです。それもなんかちょっとなんでだろうって思われるような亡くなりかたで、ほんとに生活は大変だろうなと思います。

村田：ありがとうございます。ちょっとそろそろまとめに入ろうかなと思うんですけども、2013 年から島津さんは飯館村のかたちと交流を始められて、映像を撮られてっていう、13 年からだから、5 年、6 年ぐらいだと思うんですけど、そのなかでいろんな姿を見てきたりとか、お話を聞かれたりとかしてると思うんですけど、なにか時間の流れのなかでみなさんの印象というか、なにか変わった部分とかっていうのは島津さんから見てあったりしましたか？

島津：そうですね、仮設にいらしたときは佐藤さんご夫婦がお世話人だったんですね。そのお声掛けで私も何回かずとこう、何回も行事のたんびについていうか、声かけていただいていたんですけども、そこからだんだん急に人が減っていく。やっぱり急に仮設のなかで亡くなるかたもいっしょにゃれば、引っ越していったんだってっていうことも聞く。もともと数が多いなか、亡くなったときに、その親戚の人に知らせたくても、なかなか情報もうまく伝わらなくて。いちいち村を、村の役場を通してでないと、それもあちらからご連絡をいただかないと、亡くなりましたよっていうことも知らせられないような、そんな状況だったので、大変いろんな、見えないご苦労があったんだと思います。

でもそのころは村に、まあ、高齢のかたが多かったので、戻りたいっていう想いでいたと思うんですけども、やっぱりいざ戻ってみて、自分はこれでいいんだっていう半分ちょっと居直りっぽい感じのね（笑）、気持ちもあると思うんですけども、ほんとに村の将来とか今後を考えたときに、やっぱりみなさんこう、うんとよぎるものは不安の想いなんじゃないかなって思ってますけども。

村田：そうですね、いま居直りっておっしゃってましたけども、どっかしら清々しさみたいなものがあるのかなって思いながら見ていて、もうここで生きていくんだっていう折り合いついていうんですかね。いろいろと悩まれる、葛藤もあると思うんですけども、息子さんたちと離れたりと。でもやっぱりここで生きていきたいっていう気持ちがあるんですね。そういうのがやっぱり故郷のこともそうですし、あとやっぱり放射線の被害を受けたっていうのが、なかなか仙台の内陸に住んでいるとですね、実感としてなかなか、しづらい部分があると思うんですね。

なので、そのふたつの部分があって、そういうところを自分はどうだったのかなってちょっと立ち返ると、少し考えるきっかけにもなるのかなあなんて思ったりしました。ありがとう

ございます。じゃあ、ちょっともしなにかありましたら、会場の方からですね、感想とか質問とか受け付けたいなと思うんですけれども、ありますか？

会場 A：私も島津さんと一緒に民話を聞き歩いている仲間なんですけれども、今日は、ありがとうございました。で、5人のかたの表情がとってもいいことが、さきほどお話にもあったんですけど、心に残りました。今日はとってもいい映像を見せていただいたなっていう気持ちと、それと一方ではまた、たとえば佐藤祐子さん、ね。お嫁に来て、大変な苦労をされたけど、そういうお話が途中でパッとこう、切れていて、もう少しお話したかったっておっしゃってたって言うんですけど、佐藤祐子さんもだし、みなさんのお話をね、もう少しこう、この飯館で暮らしてきて、原発事故に遭って、そして戻ってきたときの想いに、その、ここに戻るっていうふうに至ったのか、もうちょっとじっくり聞いてみたいなっていうふうな気持ちも残りました。感想になると思うんですけど。

村田：たぶんまだあれですよ、ここに入っていない部分もたくさんあったりするんですよ、映像素材。そういったものもこういった形で出して行ったり、見られる機会があってもいいのかななんて思いますね。

会場 B：この話とは直接関係ないんですが、飯館村っていうのはですね、行政上ね、どういう形で、今後やっていこうかなっていうのがちょっと知りたくて参加したんですけれども。なんか見ると 60 歳以上のかたが 1000 名近く帰られたっていうことを聞いて。長野県にも姥捨てという村があってね、JR から眺めると自然環境が素晴らしい、段々畑なんかがあってね、環境が非常に自然に似てるなって映像を見てただけど、なんか、表現が悪くて失礼になるんですが、60 歳以上の人ばかりの姥捨てっていうような感じのね、環境になっていて、将来の姿が、行政、どういう形で人を呼んで、村を立て直すのかっていう、ヴィジョンがちょっと見えないのね。七ヶ宿町ではね、一子には 30 万、二子には 50 万、三子には 70 万、小学校中学校出るまで学費食費は無料だよと、そんな形で町おこしをやって、どんどん若い世代を集めようと町おこしをやっているところもあるんで、ちょっと飯館村の将来ヴィジョンが見えなくて、どうなっているのかなっていうのが私は気になりました。以上です。

島津：飯館村の小学校、中学校、それから幼稚園の世代、保育所、その世代で一貫の大きな建物というか学校を作られたんですね。で、いままでの既存の学校も結構立派な建物だったんですけども、そこは線量が心配だということで、そこは使わないっていう方針で、大変立派な学校を作られて、そしてそこはいま子供たちが 100 人ぐらい、そこに通っているって言うんですが、実際は、村に住んでそこに通っている子供は 10 人ぐらいでしょうか。それ以外は、福島とか川俣とか近隣の避難先からスクールバスで通っているみたいです。とに

かく子供たちを集めたい、そのバス代から、なんかこう、有名ブランドの制服があって、それから経費もすべてタダでっていうようなことで。子供たちを集めれば、その親の世代も集まるんじゃないかっていうことで、村としてはやってはいらっしゃるんですが、やっぱり七ヶ宿とはまた違うところが、あるんだろうかなって思いますが。

村田：村の外から小学校に通っているっていうのは、村に住むのはやっぱり不安とか心配があるからっていうことなんですよ。そうですね。まあ、今後のことっていうふうになるといろいろ難しい部分もあると思うんですけど、先のことも重大な問題だとは思いますが、けれども、いままず帰られて、みなさんが住んでいらっしゃるっていうことですね。ほか、なにかあれば。

会場C：私は田舎が川俣町の山際なんですけれども、状況として飯館村とおなじ状況にあって、いま両親が同じように戻って、行ったり来たりして暮らしています。商店をやっていたので、震災前は、映像に出てきたようなかたたちが入れ替わり立ち替わりやってきて、おしゃべりをしたりっていう日常が毎日あったので、今日はそれまでの、いろんなひとの、ばあちゃんとかじいちゃんの話聞く時間がまたあったような気がして、とても懐かしく思いました。

それで、若い人がやっぱり戻ってこれないっていう状態がいろいろあると思うんですけど、私も震災当時、実家には住んでいなかったんで、なんというか、出身地として心配っていう気持ちもあり。ただ、実際に住んでいる両親とは違う、当事者と当事者ではないっていう線引きがすごく、家族のなかにもあって。ただ高齢者が戻ってきて、なんて言うんですかね、人口が少ない状況で暮らしているっていうところから、これからどういうふうに私たちはやっていけばいいんだろうっていうことをずっと考えるんですけど、ちょっと答えが見えなくて。たぶん飯館に戻ってきていない若い世代のかたがたも同じように考えることがあると思うんですけども。ちょっとそういったところも聞いてみたいと思いました。

福原：ありがとうございます。そうですね、確かに、若い人の帰ってこれない、こない選択をした人たちの話っていうのはあんまり聞けなかったですね。島津さん聞いたりしました？

島津：立派な復興住宅が作られたんです。で、そこに子供さん3人いるかたが戻られたっていうんですけども。それはやっぱり村を想う気持ちと、たぶん、学校が全部タダで、そういう住宅そのものもきっといろいろ恩恵受けるところがあるのかなあと思うんですが。そのお子さんたちがみんな学齢を超えたときに、果たしてその人は村に残るんだろうかっていうところについては、なんとも言えないので、ほんとに先が見えないっていうのが、強い想いだと思うんです。だから、佐藤ツメノさん、祐子さんとか、最初のほうに語られたかた

が言い足りなかったっていうのはその部分じゃないかなあって私は話を聞いてたんですけども。

村田：いま、当事者と当事者じゃないっていう話もありましたけど、村の外に出ちゃうと、そういうことを話しづらかったりもするんですかね？ それで、なかなか話題として挙げづらかったりもするのかななんて思いますね。それってその、仙台と福島とかでもそうだと思いますし、もっと、仙台でも沿岸部と内陸っていうのでもそうだと思いますし、なかなかやっぱりその状況が違ったり、被害が違ったりとかすると気にはしていても話題にしづらいっていうことは多々あることだと思いますね。ただ、でも村の今後みたいなふうに考えたら、若い人とかもいれば続いていくのかなという気はしますけどもね。

島津：なんか長正さんとね、前に話をしたときに、まだ仮設にいる、帰村になる前に話をしたときに、村に戻るの、戻らないのっていうそのことは話題にできないっておっしゃったことがあって。やっぱりほんとにそのなかでもかなり揺れながら、この方々は比較的強い意志で、自分だけは戻るんだっていうことで戻ったかたも多いんだと思うんですけども。戻らない選択をしたかた、うんとかう、迷っている、いまも迷っているかたいらっしゃるって、ほんとに自分を当事者って言ったときにどこまで言うのかなって、その場にならないと、その立場にならないとわからないことだと思うんだけど、難しいことだなと思います。

村田：そうですね、帰るか帰らないかっていうのもそうですし、帰っても今後、みたいなこともあるので、いろいろ悩んだり葛藤したりっていうのはたくさんあるんだろうなあっていうのは思います。もうひとりぐらい受け付けられますけれども。はい。

会場 D：ありがとうございます。活動されているかたとか村長の話とかはテレビでよく見るんですけど、話を聞く機会はありましたけれども、一般のかたのお話、まとめて聞く機会なかなかなかったので貴重な声が聞けたと思います。

いま若者のこと出たんですけども、私知り合いの若い人かたいるんですけども、そのかたは飯舘村には住んでいなくて、いまでも大変な状況があるので、そういうことを発信すると、村長からプレッシャー掛けられるっていうふうに言っていました。はい。まあ、パワハラだと思いますけれども。そういう状況だから帰られるかたとかが話しづらい状況がどんどんできていくのかなって思います。

で、さきほどももうちょっと話聞きたかったって出たんですけど、編集におけるポイントというか、どういう観点で入れる話、入れない話っていうのを切っていったのかっていうことと、あと先ほどの行政の行き先が見えないみたいなことあったと思うんですが、いまも出たように、村に対してとか政治に対してみたいな、なんか不満とか、そういうものがあつたのかどうかっていうその2点をお聞かせください。

福原：ありがとうございます。編集は基本的には僕がやったんですけれども、一番気をつけたのは、なるべく震災に直接関係ない話を入れるっていうことですね。最終的には元正さんの非常にダイレクトなメッセージっていうのは、僕も現場で聞いていて、とても感動したので、これを入れたいと思ったんですけれども、でも必ずしもそれだけではない、それが結論にならないようなものにしたいっていうのはありました。

震災から、時間が経って、これからの話、いまも出ていたようにとても重要なんですけれども、むしろもっと過去に遡ったり、あるいはもっと遠い未来だったり、もっと立体的に時間が見えるようなものにしたいって、なので、直接関係ない、トヨさんの80年前の家出の話とか、基本的に震災にはなにも関係がないと言えば関係がないんですけれども、それを80年後に僕らが聞いて、撮影して、編集して、いまここでそれを見ているっていう、立体的な時間の流れみたいなもののほうが、むしろ飯舘村に震災前から流れていたものを想像するきっかけになるんじゃないかなっていうことです。そういうのを意識しました。あとは元正さんの亡くなった奥さんの遺影とか、なんかそういう、震災があってもなくても、その土地にはたくさんの人が生きてって死んでってってという歴史があるので、そういう長い時間軸を見せたいってのが、編集の意図です。

で、もう一個なんでしたっけ、政治的な…難しいですねえ。不満はもちろんあったと思いますが、特に祐子さんとか重子さんとか、みなさんそうですかね。なんらかの意味で諦めないわけにはいかないっていうある種の諦念がみなさんあったと思うので、それをこう、どう、実際どう考えたらいいか。難しいところですが。不満は絶対にあるとは思いますが、それを言ってもしょうがないってところがスタート地点になっちゃっていると思います。

島津：うん。このなかにはいないですけども、別なかたで、インタビューさせていただいたら、村長さんが帰れっていうんだから私は帰ってきたって言い方をされたかたがいたんですけども。でも、それは自分が建てたおうちに戻られたっていうことでもあるし、直接その、いわゆる町からの圧力であったり、政治的なものについては、言葉の端々には出てきますけれども、直接的なものはそんなにはないかなと思います。

ただ、実はトヨさんの息子さんが亡くなったっていうその状況っていうのは、いわゆる福島だと、福島医大とかそういうところで診ていただいていた、どう見てもこれは不審な亡くなり方だなと思うんですけども、それをお医者さんはわかりません、死因がはっきりわかりませんってというような言い方をされるんですね。で、やっぱり癌で亡くなる方とかほんとに多くて。それでその息子さんも、もしかしたら原爆病じゃないかなって私なんかは思ったくらいなんですけれども。そういうような方のお話はなかなかね、直接的には表には出てこないことだと思うし、ましてやそこに、そういう不安のいっぱいあるところに、子供に帰れってはいえないんだろうなって思います。

村田：だから、みなさん不安とかリスクとかはあったうえで、どこかで折り合いをつけて、

でも生きていく。ここで暮らしていくんだみたいなところがあったりするんですかね。で、その一人ひとりのエピソードだとか想いみたいなものを記録して編集していただいたことで、飯館村のお話なんですけど、飯館村じゃなくてもって言ったら変なんですけど、すごく広く捉えられるような作りになっていて、いろんな想いがあって、で、葛藤のなかでやっているんだなというのがすごく感じられてですね、自分自身も震災のことをまた考え直すときに、すごくいい映像だなというふうに思って、僕は拝見させていただきました。

じゃあそろそろお時間なので、ここらへんで終了させていただきたいと思います。星空と路自体はですね、まだ続きますし、今日の午後2時からはこちらで、今度は yako kimura さんというかたが撮られた『あなたと話したい』という映像の上映と、そのあとちょっと場所移動しますけど座談会があります。で、展示も続きます。いま流した映像は1階の展示でも同じものが、ちっちゃいモニターなんですけれども見られるようになっていますので、もう一度見たいというかたはそちらでぜひご覧いただけたらと思います。今日はご来場いただきありがとうございました。

福原：ありがとうございました。